

# 山林は、時を超えて人を育てる

## 武蔵百年の森プロジェクト



温暖化抑制のための森林保全や生物多様性の維持は、重要な教育テーマになった。しかし、戦前の1940年にいち早く土地を確保し植林を行い、自然体験教育を始めていた学校がある。武蔵高等学校中学校、武蔵大学を運営する武蔵学園だ。当時の旧制七年制高等学校が植えたヒノキは、樹高20m超にまで育った。そして今、武蔵学園は時を超える人材育成の場として再び学校山林に着目、植林100周年の2040年を視野に「武蔵百年の森プロジェクト」を始動させた。

25年12月14日午前10時、前日からの雨が降り続くなか、埼玉県毛呂山町にある武蔵学園の学校山林にヘルメットをかぶった中学生1年、から高校2年までの生徒有志12人、杉山剛士・高等学校中学校校長、加藤十穂・同副校長ら学園関係者10人が足を踏み入れた。「武蔵百年の森プロジェクト」の第1回現地イベントだ。この日の目的の一つは森の中に光が射し込むようにする間伐。山林管理に協力を依頼しているNPO法人しんりん（宮城県大崎市鳴子温泉）の関係者が前日から現地入りし、間伐する樹木の選定もしてくれた。

### 知識を超えた体験を

生徒たちは大場隆博・NPO法人しんりん理事長の樹木に関するレクチャーに耳を傾けた後、間伐作業を見学。最後の一本は杉山校長自らチェーンソーを手に伐倒した。倒れていく側に斜め方向と水平方向に切れ込みを入れて「受け口」を作った後、反対側から「受け口」より少し上を狙って水平に切り込みを入れて「追い口」を作る。ある程度切ると木は自然の力で倒れていくが、その際に方向を微調整するのが難しい。生徒たちは作業を間近で眼を凝らして見守った。木が倒れ地面に弾むと生徒たちからは大きな拍手と歓声が湧き上



根津育英会武蔵学園 学園長 池田 康夫

がった。その後、倒れた木材の運び方などもNPO法人しんりんのスタッフが実演してくれた。武蔵学園は1922年に日本初の私立旧制七年制高等学校として発足、「東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」「世界に雄飛するにたる人物」「自ら調べ自ら考える力ある人物」を「建学の三理想」として掲げている。池田康夫学園長は「武蔵では建学の三理想の実現に向け、単なる知識の修得にとどまらず、物事を観察し、その体験をとおして、自ら考えて根本原理を追求する教育が脈々と受け継がれてきた。学校山林の活用も、この方針に沿ったものだと強調する。

### 旧制高校から受け継ぐ

学校山林は1940年、保護者からの寄付金で約3万2000平方メートルの土地を購入、当時の旧制高校生がヒノキを植えたのが起源だ。その後60年に再度ヒノキ、92年の学園創設70周年に広葉樹（コナラ・



伐倒された木を興味深げに見つめる生徒たち

クヌギ）1000本も植えた。60年以降は毎年春に、入学したての中学1年生が親睦会を兼ね山林遠足をするのが恒例だ。ただ、地元旧家に長年委託してきた管理が高齢化で不可能になり、過去3年ほど手入れが行き届いていなかった。苦境を救ったのが日本各地で地域活動に力を入れている加藤副校長の人間力だ。教師のための林業関連のイベントで知り合った大場氏に相談したところ、サポートを快諾してくれた。12月のイベントでも森林のプロから多くの学びを得た。例えば下草が少なかったため、当初、生徒や教師たちは「山はあまり荒れていないのでは」と思った。しかし大場氏は「下草がないのは樹間が詰まり日光が射し込まないから。このままでは樹木の生育が悪くなる」と説明。実際に間伐後は日光が射し込み一気に明るくなり、生徒たちは森林整備の大切さを目の当たりにした。

### 大学の教養科目でも

武蔵大学でも、学校山林を活用した講義を展開中だ。22年4月に設立したリベラルアーツ&サイエンス教育センター（LASEC）では全学生に向けた分野横断的な共通の学びの機会を提供しており、その中には「自然と環境」「情報とコミュニケーション」など自然科学系の分野でも設置されている。こうした分野で学校山林を活用した授業が実施されている。血液内科医で慶応義塾大学医学部長も務めた池田学園長は「学校山林は生命の尊さを体感できる場。今後は、中学生、高校生から大学生まで、さらには海外から武蔵大学に來ている留学生まで参加して、世代や国境を越えるイベントを開催できれば」と意気込む。

### 百年の歴史を見据えて

学校法人根津育英会武蔵学園 理事長 根津 公一



1940年（昭和15年）、我が国は日中戦争の最中でしたが、国内は皇紀（当時日本で使われていた暦の紀元）2600年の祝賀行事に沸いていました。祝賀大会、旗行列などが各地で行われ、当時の旧制高等学校の中にはこれらの行事を催す例が見られました。

武蔵学園の前身である旧制七年制武蔵高等学校でも、紀元2600年の記念事業をどうするか話し合われました。その結果は、「この年を単なるお祭りに終わらせるのではなく、10年、20年、100年と続く歴史を見据え、小さくても永続性のある事業を行おう」というものでした。そうした話し合いを経て、第3代校長山本良吉が決めたのが、埼玉県の山中に学校山林を持ち、それを育てていく計画でした。学校山林は、当時の生徒自身が植林することでスタートしました。

その後旧制武蔵高等学校の後身である、武蔵大学、武蔵高等学校中学校では、この学校山林を教育の材料とし、フィールドワーク、山林遠足などを行い、自然環境の中での生命の流れと営みを学ぶとともに、戦後も何回か生徒による植林が行われてきました。

そしてこの度、私たちは先輩の営みを受け継いで「武蔵百年の森プロジェクト」を発足し、持続可能な社会を目指して、山林を様々な教育活動に活用するとともに、2040年までの長期整備計画を策定することにしました。本プロジェクトを通じて、武蔵学園が人間と自然との共生に貢献できれば幸いです。



第3代校長の山本良吉氏も参加した1940年11月の記念式典



造園家・東京都市大学 学長付客員教授 涌井 史郎氏

武蔵高等学校中学校は4月に創立記念行事として、造園家で東京都市大学学長付客員教授の涌井史郎氏を招いた講演会を開催した。題名は「自然共生文明と持続的未来」。涌井氏は地球の現状を「生命圏が吸収できる量の10倍近い二酸化炭素を排出し、年間4万種近い絶滅種が発生している」と説明し警鐘を鳴らした。人類が持続的に生存するために守るべき境界線「プラネタリーバウンダリー」を超えかねない状況を改善するには、「自然との共生しかない」と主張。高校生、中学生には「常に自然に対して興味と関心を寄せ、不思議さの鍵穴を見つけてほしい」と呼びかけた。デジタル技術に関しては「知識量はAI（人工知能）の方が確実に優位だろうが、人間にはAIにない五感がある。デジタルの下僕にならず、五感が脳が反応して生じる感性を大切にしてほしい」と述べ、「その感性をどう生かすかは自然から学ぶしかない」と強調した。涌井氏が示した「リアルな自然からの学びの大切さ」は、まさに「武蔵百年の森プロジェクト」の方向性と重なった。

### 本物の自然で 共生の道学へ



学校法人 根津育英会武蔵学園 武蔵大学 武蔵高等学校 武蔵中学校

〒176-8534 東京都練馬区豊玉上1-26-1